2018 Annual Report

通信制高等学校生徒の中学時代に打ち込んだ経験が 中学校生活の満足度に与える影響

藤後 悦子(東京未来大学こども心理学部こども心理学科)

小林 寛子(東京未来大学モチベーション行動科学部)

竹橋 洋毅 (関西福祉科学大学心理科学部)

平部 正樹(東京未来大学こども心理学部こども心理学科)

藤本 昌樹(東京未来大学こども心理学部こども心理学科)

要約

通信制高校生の中学時代はどのようなものであったのだろうか。本研究では、1,086名の通信制高校生を対象に、過去の中学校生活の満足度を取り上げ、それらに影響を与えている経験内容を明らかにすることを目的とした。中学校生活の肯定的な経験としては、「打ち込んだ経験」について取り上げた。その結果、「打ち込んだ経験」の上位には、男女ともに友達とのつきあい、部活動、趣味・娯楽が挙がった。「打ち込んだ経験」が中学校生活の満足度に及ぼす影響を重回帰分析で検討した結果、男女ともに部活動および友達とのつきあいに打ち込んでいるほど、趣味・娯楽に打ち込んでいないほど、そして女子では学校行事に打ち込んでいるほど中学校生活の満足度が高かった。次に部活動の経験を詳細に確認したところ、同学年の仲間との関係、先輩との関係、顧問やコーチとの関係において嫌な体験が多く、その中でも同学年の仲間との嫌な体験が多いほど、中学校生活の満足度は低かった。これらの結果を踏まえ、通信制高校での支援内容を考える際、中学時代での打ち込んだ経験を生かして、かつネガティブな経験を配慮して高校でストレスを感じたときにそれを乗り越えるための既有経験として活用することを検討した。

キーワード:通信制高校、入学前の肯定的体験、中学校生活の満足度

問題と目的

通信制高等学校は年々増加しており、2017年には 250校となり、生徒数は182,515人となった(文部科 学省, 2017a)。通信制高等学校(以下、通信制高校) とは、全日制の高等学校とは異なる形態であり、その 法的根拠は学校教育法 (昭和22年法律第26号) の第 45条 (第51条の9で準用する場合を含む。) に基づい て制定されている高等学校通信教育規程(昭和37年 文部省令第32号)である。通信制高校の教育方法は 「添削指導、面接指導及び試験の方法により行なう ものとする」と規定されており、全日制のように毎日 学校に行く必要はない。通信制高校は、そもそも勤労 青年に対する教育機会の保障と教育の提供が目的で あったが、1990年代以降は生徒像の多様化が進行す るとともに、「不登校・高校中退者」の受け皿の色合 いを帯びてきた(内田・濱沖, 2015)。定時制高等学 校655校、通信制高校149校を対象とした文部科学 省委託の「高等学校定時制課程・通信制課程の在り 方に関する調査研究」(全国高等学校定時制通信制 教育振興, 2012) によると、通信制高校には、不登校 経験者14.6%、特別な支援を必要とする者8.5%、心 療内科等への通院歴がある者5.6%が在学していた。 現代の通信制高校は、不登校や発達障害、心の病

気、中退経験者など様々な背景を抱える者への教育 機会、そして従来からの勤労青年への教育機会という 多様なニーズに対応しているのである。

現在中核となっている不登校経験者や高校中退経験者は、学校生活や人間関係のもつれにより、精神的に強くダメージを受けている場合もあり、進学後の学校生活や学習に課題を抱えることが多い(上野、2008)。ゆえに個々の経験に配慮した支援が求められるが、通信制高校では、すでに様々な試みがなされている。例えば濱崎・山本(2016)は、通信制高校3校119名に対するリラクゼーションワークの実践を行い、効果を上げている。また、通信制高校では自分のペースで学習でき、職業体験学習への参加など主体的な進路決定を可能とする環境があり、対人関係において適度な距離が取りやすい(長谷川、2016)。すなわち通信制高校のカリキュラムそのものが個々人のペースにあった支援環境であるともいえる。

通信制高校生に対して、このような個人が持つ課題を補完するような支援も有効であるが、一方で、対人援助において「人のもつ、より健康な部分や強い部分に働きかけることで、コンピタンスを発揮・向上させることに重きを置く」(植村、2017)という視点も重要であろう。つまり、その人が持っている健康的な側面を重視し、その資源を活用して、問題解決を図ってい

くのである。このような視点から通信制高校生が入学 前の中学時代に打ち込んだ経験を把握しておくこと は、今後のストレスマネージメントにおいても役に立 つであろう。

そこで中学校生活では、どのようなことが起こりう るか考えてみる。小学校から中学校に移行するにあ たり、最も大きな変化は学区が広くなることと、学校 行事や委員会がより生徒主体となること、部活動が開 始することなどが挙げられる。中学生の学校行事は、 高校や大学にわたる学校生活にも長期的な影響を及 ぼすことが明らかとなっている(河本,2014)。そし て、この学校行事以上に中学生の生活の中心となるも のが、部活動であろう。

部活動とは、学習指導要領で課外活動として位 置づけられており、中学校学習指導要領解説総則編 (文部科学省, 2017b) では、その教育的意義を「ス ポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向 上や責任感,連帯感の涵養,互いに協力し合って友情 を深めるといった好ましい人間関係の形成等に資す るものである」としている。また運動部活動に特化し たものではあるが、文部科学省の「我が国の文教施 策」(文部科学省, 1998)では、「運動部活動は、学 校教育活動の一環として、スポーツに興味と関心を持 つ同好の児童生徒が、教員等の指導の下に、自発的・ 自主的にスポーツを行うものであり、より高い水準の 技能や記録に挑戦する中で、スポーツの楽しさや喜 びを味わい、学校生活に豊かさをもたらす意義を有し ている」と述べている。実際、ベネッセ教育総合研究 所の「子どもの生活と学びに関する親子調査2016」 によると、部活動に入っている中高生のうち8割以上 が、部活動が「楽しい」(とても+まあ)と回答し、こ のような部活動の「楽しさ」は学校生活の充実度にも 関連していた。「部活動が楽しい」と感じている層は、 「自分の学校が好き」(とてもあてはまる+まああて はまる) の割合が中学生では84.5%と高かったのであ

そもそも一般的に中学生は、どの程度部活動に参 加しているのであろうか。2016年12月に全国の中学 2年生全員を対象に実施したスポーツ庁「平成28年 度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」によると、 86.1%の男子、89.9%の女子が部活動に所属してい ることが明らかになっている。都道府県によっては、 生徒に部活動加入を義務付けている学校も少なくな

く(中澤, 2017)、通信制高校の生徒も中学時代には 部活動に加入していた可能性も高い。ゆえに学校行事 と同様に生徒の主体的関わりが求められる部活動に おいての打ち込んだ経験は、生徒の発達に対して長 期的な意味づけがなされ、かつ通信制高校での生活 にも影響を及ぼす可能性は高いと考えられる。

一方で、部活動は充実感を与えてくれるのみでな く、中学生にとってのストレッサーにもなりうる。加え て日本の部活動は、一度退部すると他の部活動に入 りづらい雰囲気があり、部活動への不適応は学校生 活の不適応へと連動しやすい。実際に中学校での不 登校経験者1581名を対象とした調査では、不登校の 理由として、部活動の友人や先輩との関係が23.1%と 上位に挙がっている(不登校生徒に関する追跡調査 研究会, 2014)。このように部活動とは、肯定的側面 とともに否定的側面も伴うものであるが、実際に通信 制高校生は中学時代、部活動をどのように体験して いたのか、またその体験が、中学校生活の満足度にど のように影響を与えたのか等、その詳細は明らかでな

そこで、本研究では、通信制高校生の入学前の中学 校生活の満足度について明らかにし、それらに影響を 与えている経験の内容を肯定的・否定的側面から検 討することを目的とした。なお、入学前の肯定的な学 校生活としては、学校行事や部活動以外にも勉強や 趣味などの「打ち込んだ経験」について取り上げる。 いずれも高校での精神的健康に対する予防的介入を 考案する際、こうした経験をストレスを感じたときにそ れを乗り越えるための既有経験として活用すること、 それによって精神的健康を保つことが可能ではない かと想定されるためである。また、否定的な側面とし て部活動におけるネガティブな経験を取り上げること とした。

方 法

(1) 対象者

対象者は、通信制高校の生徒であった。この通信 制高校は全国に10キャンパスを有する、私立の広域 通信制高校である。そのうち、関東圏2キャンパスに、 2014年7月時点で所属する全生徒1,086人を対象とし た。

(2) 倫理的配慮

東京未来大学の倫理委員会で承認を得た。フェイスシートに回答は任意であることと、成績等には関係しないことを明記した。データはID 処理により、匿名化して分析した。

(3) 調査方法

調査時期は2014年7月であった。全生徒を対象とするクラスごとの一斉ホームルーム時に、担任教員が調査票を直接配付・回収した。回収率は68.6%であった。

(4) 調査内容

調査内容は、基本項目、中学時代の学校生活に関する項目、精神健康関連項目から構成された。基本項目は、学籍番号、性別、年齢、クラス、コース、入学年月、入学形態、在籍高校数、通信制高校入学理由、通信制高校入学前の体験であった。本研究では、中学校生活の肯定的側面として「打ち込んだ経験」、否定的な側面として部活動におけるネガティブな経験を取り上げた。

① 中学校生活の満足度

中学校生活の満足度に関する1項目「中学時代の学校生活に対して、どのくらい満足していたか」について4件法(1.満足、2.どちらかといえば満足、3.どちらかといえば不満、4.不満)にて回答を求めた。なお分析の際は満足4点、どちらかといえば満足3点、どちらかといえば不満2点、不満1点と逆算で計算した。つまり得点が高いほど、中学校生活の満足度が高くなる。

② 中学校生活で打ち込んだ経験

高校入学前に打ち込んだ経験の有無として、「勉強」「学校行事」「部活動」「趣味・娯楽」「友達とのつきあい」「その他」「特になし」について複数回答を求めた。

③ 中学時代の部活動におけるネガティブ経験

まず、中学校の部活動の所属に関して「運動部」、「文化部」、「なし」について回答を求めた。次に、部活動経験あり群の「運動部」と「文化部」の回答者を対象に、部活動でのネガティブな経験として、「顧問やコーチとの関係」「先輩との関係」「同学年の仲間

との関係」「後輩との関係」「その他」「特になし」を 挙げ、経験したものについて複数回答を求めた。

(5) 解析方法

データ解析にはSPSSver.20を用いた。

結 果

回答者の基本情報は、平部・小林・藤後・藤本 (2016) に詳しく記載されているが、男子274人 (36.9%)、女子458名 (63.1%) であった。平均年齢は、男子17.3歳 (SD=2.6)、女子16.8歳 (SD=1.6) であり、男子の方が有意に平均年齢が高かった (t(397.06)=2.68, p<.01)。通信制高校に入学した理由は、特になしが10.7%でありそれ以外の約9割が学力、対人関係、家庭、病気、仕事上などの様々な理由を抱えていた。

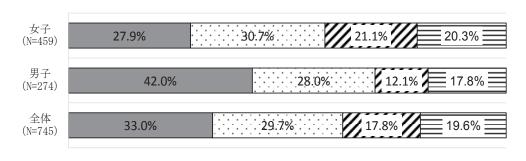
(1) 中学校生活の満足度

通信制高校生がどのような中学校生活を送っていたのかを検討するために、まず中学校生活の満足度を測定する1項目の記述統計を確認した。725名の通信制高校生の中学校生活の満足度の平均値は、2.76 (SD=1.11)であり中点より高かった。次に、男女別に平均値を検討した結果、男子2.94 (SD=1.12)、女子2.66 (SD=1.09)で男子の方が有意に得点が高かった(t (721) =3.30, p<.01)。

次に満足度の詳細を明らかにするために、全体および男女別に満足度の回答分布を図1に示した。結果は、不満が約2割、どちらかと言えば不満を合わせると27.4%と約3割が示されたものの、「満足」および「どちらかといえば満足」を合わせると6割以上が満足を示していた。特に男子では、その傾向が高く、約7割が中学校生活に満足していたという結果となった。

(2) 中学校生活で打ち込んだ経験と中学校生活の 満足度

通信制高校生の中学時代の生活実態を明らかに するために、中学校生活で打ち込んだ経験6項目を取 り上げ回答を求めた。その結果、図2に示す通り、友 達とのつきあいが最も多く、続いて部活動、趣味・娯 楽、学校行事であった。特になしと回答したものは、



■不満 ■満足 ごどちらかといえば満足 2どちらかといえば不満

図1 中学校生活の満足度(男女別の割合)

全体15.8%、男子15.3%、女子16.0%であり、約85% の生徒が中学時代何らかの打ち込んだ経験を有して いたのである。その他は、全体で5.6%示されたが、そ の内容は男女ともに外部の習い事が多く、クラブチー ムのサッカーや新体操、ダンス、委員会活動、生徒 会活動、芸能活動、恋愛などが挙げられた。

次に、同サンプルを対象に、通信制高校生の中学 校生活の満足度を被予測変数として重回帰分析を 行った。結果、モデルは有意であった(F(4,720) =38.61, p<.001, R²=.17,表1)。具体的には、学校行 事、部活動、友達とのつきあいへの打ち込んだ経験 が強いほど、中学校生活に満足しており、趣味・娯楽 への打ち込んだ経験が強いほど中学校生活の満足度 が低いことが示された。

男女別にも重回帰分析を行い、パターンの違いを 探索的に検討した(表1)。結果、男女ともにモデルは 有意であった (男子 F (4,259) =13.69, p<.001, R^2 =.16; 女子 F (4,454) =27.21, p<.001, R^2 =.19)。 両群を通して、部活動と友達のつきあいへの打ち込 んだ経験が強いほど、学校生活に満足しており、趣 味・娯楽への打ち込んだ経験が強いほど、中学校生 活の満足度は弱かった。それに加えて女子では学校 行事へ打ち込んだ経験が強いほど、中学校生活の満 足度が高かった。

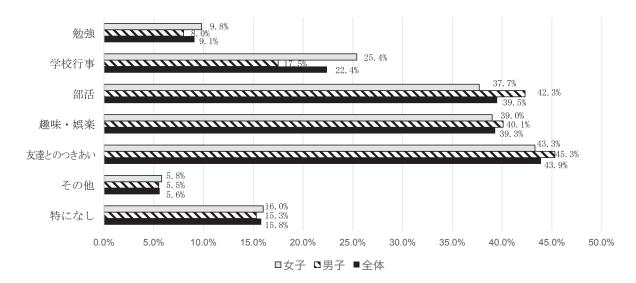


図2 中学時代に打ち込んだ体験をした生徒の割合

表1 通信制高校生の中学時代に打ち込んだ経験が中学校生活の満足度に与える影響 (重回帰分析・ステップワイズ)

	全	体	<i>。</i> 男-	_	女子			
	β	<u>t</u> 值	β	<i>t</i> 値	р	<i>t</i> 值		
勉強								
学校行事	0. 15	3.91 ***			0. 20	4.33 ***		
部活動	0. 17	4.81 ***	0. 27	4. 73 ***	0.12	2.73 **		
趣味・娯楽	-0. 11	-3.30 **	-0. 13	-2.32 *	-0. 10	-2. 41 *		
友達とのつきあい	0. 27	7. 57 ***	0. 29	5. 08 ***	0. 27	6. 10 ***		
その他			0. 12	2. 13 *				

^{***}p<.001, **p<.01, *p<.05

(3) 部活動の経験が中学校生活の満足度に与える 影響

中学になると初めて部活動が開始される。部活動は男女ともに中学校生活の満足度に肯定的な影響を与えていた。そこで通信制高校生が中学時代に活動していた部活動の実態をさらに検討することとした。なお、部活動へ打ち込んだ経験は中学校生活の満足度に正の影響を与えていたが、中学時代の部活動はネガティブな経験も多く不適応の要因にもなりうる。そこで部活動のネガティブな側面が中学校生活の満足度に与える影響も併せて検討することとした。

はじめに通信制高校生の中学部活動加入者の実態を確認した結果、男子 (N=265) では、運動部187名 (70.6%)、文化部16名 (6.0%)、所属なし58名 (21.9%)、運動部+文化部4名 (1.5%) であった。

女子 (*N*=458) では、運動部213名 (46.5%)、文化部128名 (27.9%)、所属なし102名 (22.3%)、運動部+文化部15名 (3.3%) であった。運動部の内容は、野球、サッカー、バスケットボール、バレーボール、バドミントン、陸上などが多かった。自由記述の内容から途中で退部したものも散見された。文化部の内容は、吹奏楽部、演劇部、美術部などが多かった。

次に運動部と文化部の所属経験者を対象に、部活動内の嫌な経験について尋ねた。結果、部活動経験者全体(33.2%)、女子全体(43.7%)、運動部(29.2%)、文化部(44.4%)では、同学年の仲間との関係が最も多かったが、男子では顧問やコーチとの関係(24.1%)が最も多かった。同学年の仲間との関係、顧問やコーチとの関係、先輩との関係がそれぞれのカテゴリーで上位3つに入っていた。

表2 中学の部活動における嫌な体験の記述統計

	部活動 (_N =545)	男子 (N=203)	女子 (W=341)	運動部 (_N = 400)	文化部 (_N =144)
顧問やコーチとの関係	135	49	85	103	32
	24. 8%	24. 1%	24. 9%	25. 7%	22. 2%
先輩との関係	141	32	108	101	40
	25. 9%	15. 8%	31. 7%	25. 2%	27. 8%
同学年の仲間との関係	181	32	149	117	64
	33. 2%	15. 8%	43. 7%	29. 2%	44. 4%
後輩との関係	39	8	31	27	12
	7. 2%	3. 9%	9. 1%	6. 7%	8. 3%
自分の親との関係	42	14	28	32	10
	7. 7%	6.9%	8. 2%	8.0%	6. 9%
友達の親との関係	21	5	16	15	6
	3. 9%	2. 5%	4. 7%	3. 7%	4. 2%

部活動の種類による中学校生活の満足度の違いを 明らかにするために、部活動の種類(運動部/文化部 /無所属)と性別を独立変数、満足度得点を従属変数 として二要因の分散分析を実施した。その結果、部活 動の種類で主効果が示された (F(2,688) = 14.40, p <.001)。多重比較の結果、運動部2.99 (SD=1.04)、 文化部2.49 (SD=1.11)、所属なし2.48 (SD=1.16) で 運動部が文化部 (p<.05) と所属なし (p<.001) よ り有意に得点が高かった。

次に部活動内の経験が中学校生活の満足度に与 える影響を明らかにするために、運動部および文化 部経験者を取り出し、部活動内の嫌な経験6項目と 打ち込んだ経験1項目を予測変数、満足度を被予測 変数とした重回帰分析を性別および部活動別に行っ た(表3)。結果、それぞれのモデルは、有意であった (全体 F (3,534) =30.08, p<.001, R^2 =.14; 運動部 全体 F (3,394) =19.51, p<.001, R^2 =.12; 運動部 男子 $F(2,181) = 8.12, p < .001, R^2 = .07$; 運動部女 子 F (3,209) =13.91, p<.001, R²=.15; 文化部全体 $F(2,137)=10.86, p<.001, R^2=.12$; 文化部男子 F(2,13) =6.99, p<.01;文化部女子 F(2,121) =10.04, $p < .001, R^2 = .13)$

部活動所属者全体および運動部、文化部全体の 共通点としては、同学年の仲間との関係が大変なほ ど、中学校生活の満足度は低く、部活動に打ち込ん だ経験が強いほど中学校生活の満足度は高かった。 加え部活動所属全体では、親との関係が悪いほど運 動部全体では先輩との関係が悪いほど中学校生活の 満足度が低かった。さらに、性別、部活動別に見てみ ると、運動部の男子では、後輩との関係が悪いほど、 女子では同学年との関係および親との関係が悪いほ ど、中学校生活の満足度が低く、男女ともに部活動に 打ち込んだ経験が強いほど中学校生活の満足度が高 かった。次に文化部を見てみると、男子では先輩との 関係および親との関係が悪いほど、中学校生活の満 足度が低く、女子では同学年の関係が悪いほど中学 校生活の満足度が低く、部活動に打ち込んだ経験が 強いほど、満足度が高かった。

表3 部活動の嫌な経験と部活動に打ち込んだ経験が中学校生活の満足度に与える影響 (重回帰分析・ステップワイズ)

	全体 (_{N=} 538)		運動部全体 (N=398)		文化部全体 (N=140)		男子運動部 (_N =184)		女子運動部 (_N =213)		男子文化部		女子文化部	
											(N:	(N = 16)		124)
	β	<i>t</i> 値	β	<i>t</i> 値	β	<i>t</i> 値	β	<i>t</i> 値	β	<i>t</i> 値	β	<i>t</i> 値	β	<i>t</i> 値
顧問やコーチとの関係														
先輩との関係			-0. 10	-2.18 *							-0. 62	-3. 19 **		
同学年の仲間との関係	-0. 26	-6. 38 **	-0. 26	-5. 42 ***	-0. 22	-2.77 **			-0.31	-4. 92 ***	*		-0. 17	-2.02 *
後輩との関係							-0.18	-2.56 *						
自分の親との関係	-0.10	-2.54 *							-0. 15	-2. 28 *	-0. 45	-2.33 *		
友達の親との関係														
部活に打ち込んだ経験	0. 25	6. 13 ***	0. 20	4. 21 ***	0. 31	3.95 ***	0. 23	3. 25 **	0. 20	3. 16 **			0. 35	4. 12 ***

^{***}*p*<.001, ** *p*<.01, * *p*<.05

考察

本研究では、通信制高校生における中学校生活の 実態を把握し、中学校でのポジティブな経験を通信 制高校での生活の資源として活用できないかと考え た。その中で特に学校生活への満足度と関連するこ とが明らかになっている(ベネッセ教育総合研究所, 2016) 部活動について詳細に検討した。

(1) 通信制高校生の中学校生活の満足度

通信制高校生の中学校生活の満足度は、約7割の 生徒が満足したと回答しており、これは今までの不 登校を中心とした通信制高校生のイメージとは異な るものであった。本対象者の入学理由等を分析した 平部・小林・藤後・藤本 (2016) の研究では、対象者 1086名のうちなんらかの入学前の否定的な体験が あったものは76.8%に上っており、その中でも不登校 は43.3%と高かった。つまり入学前に否定的な経験が 76.8%もあったにも関わらず、全体では約6割、そして 男子では約7割の生徒が中学時代を満足していると 回答していることは大きな意味を持つ。入学前の否定 的な経験という問いの仕方のため、中学時代のみで なく高校での否定的な経験もカウントされているかも しれないが、それでも中学校生活の満足度には注目 すべきであろう。本研究は、通信制高校生が中学時 代を回顧して答えているため、実際に本人たちが中学 校時代に感じていていた満足度とは異なっているか もしれない。しかしながら、回想法そのものの妥当性 は検証されているため (Greenhoot, 2013)、一定の評 価は得られたと考えられるであろう。本研究で示され た中学校時代をポジティブなものとして捉えている感 覚は、通信制高校で生活を送るうえでも、貴重な内的 資源となる。

(2) 中学校生活の満足度に与える中学時代に打ち 込んだ経験とは

それでは通信制高校生は、中学時代にどのような活動に打ち込んでいたのであろうか。中学時代に打ち込んだ経験を見てみると男女ともに、「友達とのつきあい」(43.9%)、「部活動」(39.5%)、「趣味・娯楽」(39.3%)が高く、女子では「学校行事」(25.4%)も高かった。一方で「特になし」は15.8%にすぎず、約8割以上の生徒が何らかの打ち込んだ経験を中学時代に有していた。

今回上位だった「友達とのつきあい」「部活動」「趣味・娯楽」についてだが、中学生4206名を対象とした部活動の調査によると(藤田,2006)、中学生の部活動の楽しみは練習40.0%、おしゃべり32.5%、試合22.0%であり、3割の部員が友達との交流である「おしゃべり」を部活動の楽しみとしてとらえていた。つまり、打ち込んだ経験の上位にある「友達とのつきあい」と「部活動」は重複する可能性も高い。

次にこれらの打ち込んだ経験が中学時代の学校生活の満足度に与える影響であるが、男女ともに部活動、友達とのつきあい、そして女子では学校行事が肯定的な影響を与えていた。中学生にとって部活動や学校行事は、中学校生活の満足度を高める上で重要な要因となっていることは先行研究でも指摘されていた(ベネッセ教育総合研究所、2016)。しかしこれらの知見は、精神的な不安定さをもちうる通信制高

校生にも適用できるかは自明ではなく、加えて不登校の理由として、部活動の友人や先輩との関係が23.1% (不登校生徒に関する追跡調査研究会,2014)と上位に挙がっていたことからも、打ち込んだ経験があるかどうかは懐疑的であった。しかしながら、本研究の結果から部活動をはじめとする打ち込んだ経験が中学校生活の満足度に影響を与えることが通信制高校生においても示唆された。通信制高校生の中に、部活動に打ち込んだと答えている生徒が約4割いる事実は重要なことであろう。勿論、部活動はネガティブな側面も伴うが、少なくとも当時の生活を振り返った時に「打ち込んだ」と主観的に認識できているという事実は、通信制高校生への自信の形成に貢献していると考えられる。

一方で、打ち込んだ経験としての趣味・娯楽は、中学校生活の満足度に負の影響を与えていた。中学生の趣味・娯楽はゲーム、ネット、漫画、音楽などであったりすることが多い。不登校などの事情で家庭で過ごす時間が多い場合や、部活動を退部して自由な時間の中で趣味や娯楽の時間も増えているのかもしれない。これらの趣味・娯楽は往々にして一人で楽しむことができる時間であり、結果、趣味や娯楽は中学校生活の満足度を低めていた。趣味や娯楽に没頭するあまり、学校という外界への関心より自己という内界への関心が高まったのかもしれないが、今回の調査ではその詳細は明らかになっていない。

また中学校生活の満足度への規定要因の男女差を見てみると、女子では学校行事への打ち込みの有無が中学校生活の満足度を左右していた。これは、河本(2014)が指摘しているように、中学校の行事は小学校と比較して、責任とともに生徒の裁量で決定できる部分が増えてくることを受け、合唱コンクールの選曲や練習、運動会の全員リレーやパフォーマンスなどを通して、女子は中学校生活の満足度を高めていた結果とも類似する。今回の研究からは、男子は学校行事が中学校生活の満足度に影響を与えておらず、学校行事における男女の意識の違いが確認された。

(3) 部活動の経験の質が中学校生活の満足度に与える影響

部活動は充実すると達成感が得られるが、部活動内でのネガティブな経験も存在する。不登校経験者1581名を対象とした調査では、不登校の理由とし

て、部活動の友人や先輩との関係が23.1%と上位に 挙がっている(不登校生徒に関する追跡調査研究会, 2014)。 藤後・井梅・大橋 (2015) が大学生219名を 対象にした調査では、スポーツ場面でのポジティブ な体験、およびネガティブな体験ともに中学時代が最 も多かった。特に現在の中学部活動は全員参加を求 める雰囲気が強いため(中澤, 2017)、競技力の向上 を求める生徒、友達との交流を優先とする生徒など 異なるニーズをもった生徒が一緒に活動することとな る。藤田(2006)は、中高生への調査結果から、中学 生の3分の2は部活動にはほとんど毎回参加するが、 コミットメントが高い生徒は4割にしかすぎないと述 べている。つまり、まじめに練習しないのに部活動に 参加している生徒も多く、競技力向上を目指す生徒と の摩擦は大きくなり、部活動への意識の違いや競技 レベルの違いから友人関係でのトラブルが生じやす いのである。

部活動内の同学年の仲間との関係が中学校生活 の満足度に与える影響は、男子には見られず女子に のみ示された。嫌な体験の記述統計量をみると、男子 では15.8%、女子では43.7%が経験したと回答してい た。このことから女子は、部活動に打ち込んでいたも のの同学年とのトラブルを多く経験していた実態が明 らかになった。また女子運動部と男子文化部に関して は、自分の親との関係が中学校生活の満足度にマイ ナスの影響を与えている点にも留意したい。

最後に男女共通のことであるが、部活動の嫌な経 験は、顧問やコーチとの関係や先輩との関係も割合 が多かったが、顧問やコーチとの関係は中学校生活 の満足度に有意な影響を与えていなかった。嫌な思 いはするが、中学生にとっては同学年や先輩との関係 の影響が大きいことがここでも再認識された。

(4) 通信制高校で活用できる支援に向けて

本研究より通信制高校生は、中学時代打ち込める 経験を様々に有していることが明らかになった。その 中でも学校内で行われている部活動や行事に関する 打ち込んだ経験も豊富にあり、これらが中学校生活 の満足度に肯定的な影響を与えていた。また、河本 (2016) の先行研究でも行事等における中学校での 経験は、ある程度ストレスを受けていたにもかかわら ず、体験が個人の発達に良い意味で長期的影響を与 えていたことが明らかになっており、本研究の部活動 においても同様な側面が示された。中学時代に打ち 込んだ経験、およびストレスはあったものの打ち込ん だと意味づけられている経験を活かしながら、通信 制高校の行事やカリキュラム構成、そして個別支援等 を検討していくことが望まれる。一方で、特に女子に おいては、同学年の仲間と嫌な経験をしていることに も留意し、高校での行事や部活動では仲間との関係 に葛藤を覚えた際には相談に来てよいことや、グルー プ編成の時に女子だけにせずに男女混合にしたり、メ ンター的な立場として教師や大学生が関わったりな どの工夫も必要かもしれない。中学時代の経験を通 して、達成感と葛藤の両方を有していることが確認で きたので、丁寧に人間関係を見てあげることで自信を 取り戻し自発的な高校生活へとつながるかもしれな

また通信制高校で、今後の支援を考える際留意す べき点は、打ち込んだ経験が少なかった「勉強」に 関しての支援である。通信制高校生は、中学時代から 「勉強」に打ち込めていない様子からも、通信制高 校生に合致した学習方略やモチベーションの上げ方 を考慮する必要があろう。打ち込んだ経験を活かし ながら、打ち込んだ経験が少ない「勉強」への取り組 みも充実できるよう工夫が必要かもしれない(小林・ 平部・藤後・藤本, 2016)。

(5) 今後の課題

本研究に関する今後の課題としては3点挙げられ る。1点目は尺度の項目数について、2点目は因果関係 の方向性について、3点目は不登校経験者の抽出につ いてである。

1点目の尺度の項目数については、部活動のポジ ティブな質と中学校生活の満足度に関する項目数の 少なさについてである。当初、通信制高校生は中学時 代、部活動への参加率は低いのではないかと予想し ていた。特に不登校追跡調査では、不登校の様々な 原因の一つに「部活動の友達や先輩との関係」が挙 げられていたので (不登校生徒に関する追跡調査研 究会, 2014)、部活動への参加があったとしても、途 中で退部したりなど、ネガティブな経験が主なもので はないかと考えた。ゆえに部活動の質については、ネ ガティブなものを中心に項目形成を行っていた。しか し打ち込んだ経験の中でも中学校生活の満足度に及 ぼす影響としては、部活動の標準化偏回帰係数の値

が高かった。そこで、部活動のネガティブな経験と打ち込んだ経験の両者を投入し満足度への影響を確認したところ、打ち込んだ経験が肯定的に影響を与えていた。もし部活動内のネガティブな対人関係項目とは逆にポジティブな関係性を取り上げていたならば、どのような結果になっただろうか。今後はポジティブな項目も追加し、通信制高校生が持つ部活動におけるポジティブな側面も踏まえた上で、部活動の経験が通信制高校生に与える長期的意味づけを検討したい。

次に中学時代の満足度についての項目数である。 本研究では、中学時代の満足度を測定するものとして、「中学時代の学校生活に対して、どのくらい満足していたか」の1項目のみを尋ねた。通信制高校生は、中学時代に不登校経験を有しているものも多く、今回は、あまり時を経ていない中学時代の生活を研究対象とすることへの倫理的配慮を重視し満足度を1項目のみで測定した。しかし満足度の中身をより多面的に測定するためには、項目数を含めての再検討が必要であることは明らかであり、今後の課題としたい。

2点目の因果関係の方向性についてであるが、本研究では、中学時代の打ち込んだ経験および部活動のネガティブな経験が中学校生活の満足度に影響を与えるという方向性を想定して検討および考察を行った。しかしながら、本研究の知見はあくまで相関関係であり、因果関係を示すものではない。つまり、中学校生活の満足度が高いから打ち込み度も高まるのという方向性も想定しうるのである。今後は、ある時点で打ち込み度が高まったことがその後の時点での満足度にどのような影響を与えたかという時系列分析などの工夫が求められる。

3点目は、不登校の生徒を取り出した研究の必要性であろう。通信制の入学理由は、様々である。本研究の対象者の入学前の経験の上位3つは、友人関係の問題(50.5%)、不登校(43.3%)、教師との関係の問題(32.3%)であった。一方で問題が全くなかった生徒は20.9%となっている。通信制高校生の中には、中学時代に不登校であった生徒とそうでなかった生徒が混在しており、両者の中学校生活の質には違いがあって当然であろう。今回は通信制高校生の全体像を取り扱ったが、中学時代の不登校者とそうでなかった生徒を取り出して分析することで、それぞれの特徴が明らかになり、より個別ニーズに応じた支援が可能となるだろう。

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2016). 子どもの生活と学びに関する親子調査
 - http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=5095 <2017.11.28>
- 不登校生徒に関する追跡調査研究会(2014). 不登校に関する 実態調査報告書 第1部 調査の概要 ・ 第2部 基礎 集計編.
 - http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2014/08/04/1349956_02.pdf <2017.11.23>
- 藤田武志 (2006). 生徒の部活動への関わり方. 西島中『部活動 その現状とこれからのあり方 学事出版株式会社. 21-40.
- Greenhoot, A.F.(2013). Chapter12 Retrospective Methods in Developmental Science. Laursen,B., Little,T.D, Card,N.A. (Ed.) *Handbook of developmental research methods* (pp.196-210), Guilford Press.
- 濱崎浩秋・山本 獎(2016). 通信制高校生に対するリラクセーションワークの実践研究: 適応状態による効果の検討 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 15, 249-259.
- 長谷川 誠 (2016). 高校不登校生徒の自立支援に関する試論: 通信制高校から大学進学を果たした生徒に注目して 佛教大学教育学部学会紀要, 15, 139-151.
- 平部正樹・小林寛子・藤後悦子・藤本昌樹 (2016). 通信制高 等学校における生徒の精神健康 東京未来大学研 究紀要, 9, 167-178.
- 河本愛子 (2014). 生涯発達的視座からみた中学・高校における学校行事体験の質的検討: 大学生の回顧的意味づけに着目した参加プロセスの探究 東京大学大学院教育学研究科紀要, 54, 241-250.
- 河本 肇 (2016). 中学生の合唱コンクールへの取り組みが集団 同一視と自己肯定感に与える影響 広島国際大学心 理学部紀要, 4, 53-61.
- 小林寛子・平部正樹・藤後悦子・藤本昌樹 (2016). 通信制高 等学校生徒の家庭での学習を妨げる要因の検討: 学習動機・学習方略・自己評価の問題に着目して モ チベーション研究, 5, 12-24.
- 文部省 (1904). 高等学校通信教育規程. http://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws_search/lsg0500/detail?lawId=337M5000 0080032&openerCode=1 < 2017.12.01>
- 文部科学省 (1998). 我が国の文教政策.
 http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad199801/hpad19980 <2018.1.9>
- 文部科学省 (2017a). 学校基本調査 平成29年度結果の概要-.
 - http://www.mext.go.jp/component/b_menu/

other/__icsFiles/afieldfile/2017/12/22/1388639 _2.pdf <2017.1.9>

- 文部科学省(2017b). 中学校学習指導要領解説総則編 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/ education/micro_detail/__icsFiles/afieldfi le/2017/07/04/1387018_1_2.pdf<2018.1.9>
- 中澤 篤史 (2017). そろそろ部活のこれからを話しませんか 大月書店
- 藤後 悦子・井梅 由美子・大橋 恵 (2015). スポーツにおける ポジティブ体験・ネガティブ体験とスポーツ・ハラス メント容認志向 東京未来大学研究紀要, 8, 93-
- 内田 康弘・濱沖 敢太郎 (2015). 通信制高校における中退経 験者受け入れの推移に関する研究:中退率及び在籍 者年齢層の変遷を基にした一考察 日本通信教育 学会研究論集, 1-16
- 植村 勝彦(2017). コミュニティ心理学の理念 植村勝彦・高 畠克子・箕口雅弘・原 裕視編『よくわかるコミュニ ティ心理学』 ミネルヴァ書房. 8-11.
- 上野 昌之(2008). 通信制高校における生徒指導に関する 考察. 早稲田大学大学院教育学研究科紀要, 別冊 (16-2), 25-36.
- 全国高等学校定時制通信制教育振興会 (2012). 高等学校定 時制課程・通信制課程の在り方に関する調査研究 http://www.mext.go.jp/component/a_ $menu/education/detail/__icsFiles/afieldfi$ le/2012/05/29/1321486_01.pdf <2017.12.01>

(本研究は文部科学省科学研究費(17K01801)の 助成を得た)

Effects of experiences during junior high school on levels of satisfaction with junior high school life in correspondence high school students

Etsuko Togo (School of Child Psychology, Tokyo Future University)
Hiroko Kobayashi (School of Motivation and Behavioral Sciences, Tokyo Future University)
Hiroki Takehashi (Department of Psychological Science, Kansai University of Welfare Sciences)
Masaki Hirabe (School of Child Psychology, Tokyo Future University)
Masaki Fuzimoto (School of Child Psychology, Tokyo Future University)

Experiences affecting levels of satisfaction with school life during junior high school were examined with correspondence high school students (N=1,096). As positive experiences during junior high school days, the "experience of one dedicating self to something" was considered. Both boys and girls listed interactions with friends, club activities, and hobbies/amusements as ranking high. Effects of the experience on levels of satisfaction with school life during junior high school days were examined using multiple regression analysis. The results indicated that for both boys and girls, the satisfaction level was higher when they dedicated themselves highly to club activities and interactions with friends, and when they did not absorb themselves in hobbies or amusements. In girls, the satisfaction level was higher when they devoted themselves to school events. Moreover, experiences in club activities were minutely examined. Their satisfaction level decreased when they had many negative experiences with peers in the same grade. The contents of support provided to correspondence high school students were discussed based on these results. It is considered effective to utilize the experience of having dedicated oneself to something like a pre-existing experience, and considering negative experiences, for overcoming stress in high school life.

Keywords: Correspondence high school, Positive experience before entering school, Levels of satisfaction with junior high school life

-2017.12.1受稿, 2018.1.15受理-